

かたがみ のぶる
片上 伸 (1884~1928)



文芸評論家。野間郡波止浜村(現、今治市)出身。号は天弦。明治末期から昭和初期にかけての日本文壇の評論家。愛媛県松山中学校(現、県立松山東高等学校)時代から文学に関心を持つようになり、新体詩を文芸雑誌に、「天弦」の号で投稿していた。東京専門学校(現、早稲田大学)に進んで坪内逍遙らの指導を受け、卒業後は島村抱月主宰の『早稲田文学』記者となった。後、母校の文学部教授に就任し、大正4(1915)年、早稲田大学留学生としてロシアへ渡ってロシア文学の研究に携わり、帰国後、日本の大学で初めて早稲田大学がロシア文学科を創設したときに主任教授となった。

初め自然主義の論客であったが、やがて芸術至上主義に、さらに文学の社会性を強調する唯物史観の文学論に移行し、晩年はプロレタリア文学理論の構築に取り組んだ。伸の文学論は、時代と共に柔軟に変化するが常に真摯な言論家であり、批評家の第一人者として評価されている。

略歴

明治17(1884)年2月20日	野間郡波止浜村に生まれる。
明治33(1900)年	愛媛県松山中学校を卒業。秋山真之、菅菊太郎とともに松中三秀才といわれた。東京専門学校に進学
明治39(1906)年	東京専門学校から改称した早稲田大学を卒業し、『早稲田文学』の記者となり、自然主義の論客として本格的な執筆活動開始
明治43(1910)年	早稲田大学文学部の教授就任。反自然主義の姿勢が強まり、芸術至上主義に理解を示すようになる。
大正4(1915)年	早稲田大学留学生としてロシアに渡り、ロシア文学の研究に従事
大正6(1917)年	ロシア革命を経験
大正7(1918)年	ロシアから帰国
大正9(1920)年	早稲田大学ロシア文学科創設に伴い主任教授就任 逍遙、抱月に続く3代目の早稲田大学文学部長就任
大正13(1924)年	教職を辞し、再びロシアへ渡る。
昭和3(1928)年3月5日	45歳で永眠

(肖像画：愛媛県立松山東高等学校蔵)

〈関連図書〉

- ・『現代日本文学全集 第59』 筑摩書房 1958年
- ・昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書 第28巻』 昭和女子大学 1968年
- ・伊藤整『日本現代文学全集 第27』 講談社 1968年
- ・『現代日本文学全集 第58』 筑摩書房 1972年
- ・片上伸『文芸教育論』 玉川大学出版部 1973年
- ・井上敏夫『近代国語教育論体系』 光村図書出版 1975年
- ・愛媛県百科大事典編集委員会『愛媛県百科大事典』 愛媛新聞社 1985年
- ・『日本プロレタリア文学評論集2』 新日本出版社 1990年
- ・『片上伸全集』 日本図書センター 1997年

〈ゆかりのある場所〉…(P312, 193)